

## 時空を超えた中国古典文化との対話 —— 谷崎潤一郎の「麒麟」について ——

陳 雲 哲\*

### 始めに

日本耽美派の代表的な作家の谷崎潤一郎は生涯にわたって、二度(1918, 1926)中国大陸に渡航したことがある。一回目は朝鮮から中国東北地方を経て北京、漢口、それから揚子江を下り、九江へ寄って、廬山へ登り、又九江へ戻って、南京から蘇州、蘇州から上海、上海から杭州へ行って再び上海へ立戻り、日本へ帰ったという順であった。谷崎は旅程を通じて、おいしい中華料理を食べ、中国の京劇を見ながら、各地を転々と旅行して、中国の美しい自然を見てきた。帰国後、その旅行によって取材した作品を次々と発表した。例えば、「奉天時代の空太郎氏」、「蘇州紀行」、「廬山日記」といった紀行作品、「支那劇を観る記」、「支那の料理」といった随筆、「或る漂泊者の傍」、「秦淮の夜」、「西湖の月」、「天鵝絨の夢」、「蘇東坡」、「鮫人」、「鶴唳」等の中国を舞台とする小説、そこには彼に深い印象を残した異国に遊んだ記憶が鮮やかに表現されているのである。「美味なる中国」と「戯曲の中国」と「詩的な中国」を満喫した谷崎は、帰国後再び中国を訪れたいという希望を持っていた。その願いは、一回目の中国旅行の約七年後の1926年1月に実現できた。谷崎の二回目の中国旅行のルートは一回目よりずっと簡単で、長崎から上海に、それから、ほぼ一ヶ月間を上海で過ごして、長崎丸に乗って神戸に帰った。一回目の中国旅行では、谷崎が体験したのは主に中華料理、京劇、自然風景という「物」だったが、二回目の中国旅行では、一回目の「物」とは違って、主に中国の文士芸術者という「人」との触れ合いであった。「功德林」

---

\*吉林大学公共外語教育学院

の歓迎会、内山書店の「顔つなぎの会」、一品香ホテルにおける対話、上海文芸消費寒会などの中国における体験を、谷崎は日本へ帰った後、「上海見聞録」と「上海交遊記」にまとめて発表した。

中国を旅した日本近代作家がたくさんいるが、中国趣味の作品を創作する代表的な作家と言えば、谷崎がまず挙げられるべきだと言っても過言ではないと思う。そして、谷崎の中国旅行が終わったとは言え、中国との関係が切れてしまうことなく、生涯にわたって中国の文学者たちと関わりを持ち、中日両国の文学芸術者と交流する先駆者、両国の文学芸術界における架け橋みたいな存在である。しかも、谷崎は中国へ行く前にすでに中国を舞台とする小説を発表していた。その中では、「麒麟」は最も早く、1910年12月第二次『新思潮』第四号に掲載され、中国へ旅する前の作品の中では代表的なものだと言える。「麒麟」は中国趣味作品創作のプレリユードという存在として、中国古典文化との対話によってできたものだと思う。それゆえ、本稿は多くの谷崎の作品の中から「麒麟」を選び研究したいと思っている。

## 一. 谷崎潤一郎の「麒麟」についての概観

前の部分ですでに述べたように、谷崎は生涯において、二回中国旅行をしたことがある。しかも、中国趣味の小説や随筆などの作品を数多く発表した。実は、少年時代から漢学の塾に通っていた谷崎は中国旅行に出かける前に既に中国を舞台とした小説「麒麟」を発表した。

「麒麟」という小説は中国の春秋時代を背景に、南子夫人と孔子との間のことを物語ったのである。そのストーリーは、次のようにまとめられている。紀元前四九三年、衛の国では、苛酷な富の収奪によって国民が疲弊していた。霊公は美しい南子夫人にうつつをぬかし、政治が歪められていたのである。そこに伝道の旅を続ける孔子の一行が通りかかった。道徳の貴さ、欲に打ち勝つことの大切さを説く孔子に教化された霊公は、南子夫人を遠ざけていた。しかし南子は、霊公を取り戻し孔子をも自分の虜にしようと、さまざまな歓楽をもって孔子に迫る。けっきょく霊公は、南子の魅力に逆らうことができず、聖人は衛の国を去るので

あった<sup>1)</sup>。

孔子に関する伝記に記載された女性である南子に焦点を絞ったところは実に面白いことである。小説は、いきなり白文で始まり、読みにくい漢語がいっぱい使われ、中国古典を引用しながら、道徳に対する快樂の勝利を明快に描くところに、意外性があると同時に、道徳を持ってさまざまな歡樂を超越した孔子像も描き出されたのである。

## 二. 「麒麟」と中国古典の間テキスト性

「間テキスト性」という用語は、20世紀60年代、フランスのジュリア・クリステヴァによって作り出し、「あらゆるテキストは引用のモザイクとして構築される。テキストはすべて、もうひとつの別のテキストを吸収、変形したものである」<sup>2)</sup>と定義されたのである。間テキスト性はテキストとテキストの相互関連性を強調し、つまり、ある著者がテキストを作成する時、先行テキストから借用したり変形したりすることや、ある読者がテキストを読む際別のテキストを参照したりすることである。谷崎潤一郎の「麒麟」と中国古典とは、間テキスト性を体現する代表的な一例といっても過言ではないと思う。「麒麟」という小説は、タイトルからストーリー、文章表現まで中国古典の影が読み取れるわけである。

### 2.1 タイトルの「麒麟」と中国古典文化における「麒麟」

まず、タイトルの「麒麟」から考察していきたいと思う。麒麟は中国においてどんな存在であろうか。麒麟は中国神話に現れる伝説上の靈獸である。オスのほうは「麒」で、メスのほうは「麟」と呼ばれ、普段は優しく殺生を嫌う動物で、「仁獸」と呼ばれている。麒麟の形は鹿に似て、頭は龍に似て、背中は五色の毛に覆われ、腹の毛は黄色で、牛の尾と馬の足を持つそうである。五行説に東の青

1) 西原大輔：『谷崎潤一郎とオリエンタリズム』、中公叢書、中央公論新社、2003年、p 64。

2) 原田邦夫訳 ジュリア・クリステヴァ：『記号の解体学—セメイオチケ 1』、せりか書房、1983年、P61。

龍、南の朱雀、西の白虎、北の玄武に加えて、中央に黄龍あるいは麒麟を据えるという言い方がある。青龍は東に、春を司り、象徴する色は緑（或は青）、五行の木に属する。朱雀は南に、夏を司り、象徴する色は赤（或は朱）、五行の火に属し、白虎は西に、秋を司り、象徴する色は白、五行の水に属し、玄武は北に、冬を司り、象徴する色は黒（或は玄）、五行の金に属し、黄龍（或は麒麟）は中央に、象徴する色は黄、五行の土に属する。人生を四季に例え、若年期を「青春」、壮年期を「朱夏」、熟年期を「白秋」、老年期を「玄冬」と表現することもそれと関係があると思われる。そして、その中央を据えた麒麟は中国の伝統文化における「聖獣」だけではなく、孔子と深い関わりを持ち、孔子が生まれる前も亡くなる前も世に現れたそうである。『拾遺記』卷三「周靈王」の中で、「夫子未生時，有麟吐玉書于闕里人家，文云：“水精之子，系衰周而素王。”故二龍繞室，五星降庭。徵在賢明，知為神異，乃以綉紱系龍角，信宿而麟去」<sup>3)</sup>があり、それは「麟吐玉書」である。また『史記・孔子世家』に、「魯哀公十四年春，狩大野。叔孫氏車子鉏商獲兽，以為不祥。仲尼視之，曰：“麟也。”取之。曰：“河不出圖，雒不出書，吾已矣夫！”顏淵死，孔子曰：“天喪予！”及西狩見麟，曰：“吾道窮矣！”喟然嘆曰：“莫知我夫！”子貢曰：“何為莫知子？”子曰：“不怨天，不尤人，下學而上達，知我者其天乎！”<sup>4)</sup>がある。「仁」は儒家思想の核心であり、孔子の思想の核心でもある。「仁獣」である「麒麟」を、「仁」を主張する「孔子」を主人公とする小説のタイトルにするのは、中国古典文化との間テキスト性を成したのではないかと思う。

## 2.2 「麒麟」のストーリーと中国古典

「麒麟」という小説は、孔子、南子夫人、靈公の三人の間の物語である。そういう孔子と靈公と南子夫人との間に起こったことは『史記・孔子世家』において次の通り述べてある。「去即過蒲。月余，反乎衛，主蘧伯玉家。靈公夫人有南子者，使人謂孔子曰：“四方之君子不辱欲與寡君為兄弟者，必見寡小君。寡小君願見。”孔子辭謝，不得已而見之。夫人在綺帷中。孔子入門，北面稽首。夫人自帷中再拜，

3) 《拾遺記》，中華書局，2019年4月，p117。

4) 《史記》，天津古籍出版社 國際文化出版公司，1995年，p1812-1813。

环佩玉声璆然。孔子曰：“吾乡为弗见，见之礼答焉。”子路不说。孔子矢之曰：“予所不者，天厌之！天厌之！”居卫月余，灵公与夫人同车，宦者雍渠参乘，出，使孔子为次乘，招摇市过之。孔子曰：“吾未见好德如好色者也。”于是丑之，去卫，过曹。是岁，鲁定公卒。<sup>5)</sup>それは、いわゆる「子見南子」である。『史記』に記載された「子見南子」は割に簡潔な筆触で書き上げたが、谷崎はそれに取材して華々しく「麒麟」という物語を展開して、贅沢を極めた悪の美の南子、「仁」と「礼」を守る聖人の孔子、その対立する二人の間に立って、左右に揺れた末に、とうとう女色美に心を惹かれて、衛の君として追求すべき理想を諦め、享楽主義に陥った衛の靈公といった、生き生きとした人物像を築き上げた。

谷崎は『史記』などの中国古典のテキストを吸収しただけではなく、テキストを変形したり、自分なりに創作したりすることにも努めた。周知の通り、孔子は中国伝統の儒家文化の始祖として、現実の生活においても、文学の創作においても、神格化された聖人のような特異な存在である。孔子のイメージは不変のものではなく、むしろ古代から近代まで変遷しつつあるものである。まず、子貢の「孔子は賢人だけではなく、また聖人なり」という評価から、孟子と荀子の時代を経て、孔子は普通の賢人から聖人に変わった。それから、前漢の董仲舒の主張で、儒家以外の諸子百家を排斥して、儒学を国家教学として据えるようになり、孔子も聖賢から「素王」として尊重された。また、新朝の王莽から提唱し、後漢の劉秀に呼応され、孔子は今度「素王」から宗教化された教主になった。つまり、孔子は500年余りかかって、春秋時代の人間から、後漢の時代神様になった。しかし、谷崎は「麒麟」の中で描き出した孔子は中国の儒家創始者の人間像であり、つまり「仁愛を中心に、三綱五常を内容とする」<sup>6)</sup>ことを主張する孔子の人間像であった。それは、日本の中国古典から受容した孔子のイメージと一致して、いわゆる日本の民族「集合的記憶」と文化慣性のもとにある孔子像である。中国の歴史を振り返ってみたら分かるように、孔子は「克己復礼」を提唱して、封建時代の統治者に「仁政徳治」の社会を作ってもらうことを目指したが、統治者はかえって「忠君尊王」の主張を利用して、その統治を維持するようになることが

5) 《史記》，天津古籍出版社 国际文化出版公司，1995年，p1797。

6) 庞朴：《中国儒学》（第四卷），东方出版中心，1997年，p5。

ある。儒学をイデオロギーの核心と支えにして、また孔子を普通の賢人から聖人にして、自分の統治を固めたわけである。谷崎の作品はそこまで行かず、聖人である孔子像を描いたわけである。

「子見南子」という主線のストーリー以外に、「麒麟」において、また孔子とその弟子が衛国へ赴く途中、老子の門徒の林類と出会った時の場面を詳しく描いた。紙幅の関係で、「麒麟」の原文を挙げないことにするが、そのストーリーの原典は『列子・天瑞』である。「林类年且百岁，底春被裘，拾遗穗于故畦，并歌并进。孔子适卫，望之于野。顾谓弟子曰：“彼叟可与言者，试往讯之！”子贡请行。逆之垅端，面之而叹曰：“先生曾不悔乎，而行歌拾穗？”林类行不留，歌不辍。子贡叩之，不已，乃仰而应曰：“吾何悔邪？”子贡曰：“先生少不勤行，长不竞时，老无妻子，死期将至，亦有何乐而拾穗行歌乎？”林类笑曰：“吾之所以为乐，人皆有之，而反以为忧。少不勤行，长不竞时，故能寿若此。老无妻子，死期将至，故能乐若此。”子贡曰：“寿者人之情，死者人之恶。子以死为乐，何也？”林类曰：“死之与生，一往一反。故死于是者，安知不生于彼？故吾知其不相若矣，吾又安知营营而求生非惑乎？亦又安知吾今之死不愈昔之生乎？”子贡闻之，不喻其意，还以告夫子。夫子曰：“吾知其可与言，果然；然彼得之而不尽者也。”<sup>7)</sup> 道家の老子の弟子である林類と儒家の孔子の弟子である子貢の会話は、実は道家思想と儒家思想の会話でもある。道家の主旨は清静と無為で、自然に順応し、回帰することである。儒家の主旨は仁政徳治で、そのように国を治めることである。谷崎は、中国古典を生かして、道家思想と儒家思想を比較しながら、孔子のイメージを築き上げたわけである。

### 2.3 「麒麟」の文章表現と中国古典

「麒麟」の冒頭の部分はいきなり「凤兮。凤兮。何德之衰。往者不可谏。来者犹可追。已而。已而。」という白文で始まり、その出典の原文は『論語・第十八章・微子篇』であり、「楚狂接輿歌而过孔子曰：‘凤兮凤兮，何德之衰！往者不可谏，来者犹可追。已而，已而！今之从政者殆而！’孔子下，欲与之言。趋而辟之，不得

---

7) 《列子》，中华书局，2019，p14-15。

与之言。』<sup>8)</sup>である。楚狂は楚国の隠者で、孔子の車の前で歌い、孔子に衰えた世を避けて禍を免れるべきだと勧めた。孔子は彼と話そうと車を降りたが、楚狂が行ってしまい、できなかった。小説の冒頭のところに、その白文を置くことは、実に面白くて意味深いことである。そういう戒めの言葉で、物語の背景としての春秋戦国時代の混乱した状態を述べただけでなく、小説の結末の部分とも呼応している。と同時に、孔子の衰えた世に身を置かれても、生涯にわたって自分の信念を諦めないことはなく、自分の主張を貫こうとする姿を樹立した。

冒頭の部分だけでなく、「麒麟」の中で、漢語表現がたくさん使われている。例えば、「玉玺」とか、「瓔珞」とか、「玳瑁」とか、「炮烙」などの、読みにくい漢語がいっぱいある。小説の中で直接とか間接で引用された中国の典籍も『論語』、『史記』、『孟子』、『荀子』、『漢書』などに及んだ。それだけでなく、南子夫人の宴会の場面を描いた原文を読んだら分かるように、「麒麟」には、またいろいろな古代の料理名がたくさん出ている。「七人の女官は、さまざまの鳥と獣との肉を、皿に盛って卓上に運んだ。夫人はまたはまたその皿の一つ一つを一行に勧めた。その中には玄豹の胎もあった。丹穴の雛もあった。昆山龍の脯、封獣の躡もあった。」今の私たちの聞き慣れた料理ではないが、いずれもフィクションのものではなく、出典のある珍しい物である。例えば、「玄豹の胎」は後漢の張衡の「七命」にでた。「丹穴の雛」は、前に述べた「七命」だけでなく、また『山海経』にも、「丹穴之山有鳥焉、其状如鸡、五采、名曰凤皇。」<sup>9)</sup>がある。「昆山龍の脯」は、元の凌雲翰の「蘇武慢」に「…松下高歌、橘中残着、饥后自餐龙脯。待偷桃、曼倩重来、为问木公金母。…」があり、同じ元の時代の劉志淵の「采桑子」に「虚无妙道心坚守、虚自投来。氤氲成胎。灵质无中日月栽。时时自饮昆山酒、醉卧丹台。令摄三台。万劫迷云一豁开。」がある。「封獣の躡」は『左伝』に「晋灵公宰夫熊躡不熟。」<sup>10)</sup>がある。

谷崎は生涯を通じて中華料理に関心を持ち続けた。中華料理に言及した文章として、「麒麟」のほか、また「美食倶楽部」、「支那の料理」などがある。そして、

8) 《四书五经》，天津古籍出版社，1998年，p451。

9) 《山海经》，北京出版集团公司 北京教育出版社，2017年，p5。

10) 《四书五经》，天津古籍出版社，1998年，p2418。

各地の中華料理店の名前も作品に現れている。谷崎は料理を料理としてだけではなく、それを藝術として見ている。ただし、その後の作品に取り入れた中華料理はほとんど私たちのよく耳にするもので、「麒麟」に出たのは中国古典に出た古代の珍しいものである。谷崎は中国古典に詳しく、しかもそこから取材したり、引用したり、変形したりして「麒麟」という作品を書き上げ、中国古典との間に間テクスト性を成しているのだと思う。

### 三. 谷崎の中国古典文化への受容

さて、そういう谷崎の創作を成した根本的な原因は何であろう。それは中国古典と中国文化への受容ではないかと思う。

#### 3.1 幼年体験の追憶 — 偕楽園の中華料理

ほとんどの日本人作家が、漢文学を通じて中国文化に触れたり、中国とかわりを持つようになったりするのだが、谷崎の場合は、時間軸に沿って見れば、中華料理がその出発点だと言えることが分かる。その中華料理の店は偕楽園といい、谷崎は店の主人と子供の時から同窓だった。「幼少時代」において、その体験について、谷崎は次の通り追憶している。「その頃笹沼の家は「偕楽園」と云って、東京市内にただ一軒しかなかった有名な支那料理店で、場所は日本橋区亀嶋町一丁目二十九番地の、地藏橋と云う橋の角から二軒目にあった。」と云うことで、そして「当時、笹沼の家へ行こうとして、代官屋敷の通りから地藏橋の通りへ曲がると、二三丁も先からあの支那料理独特の匂いが強く襲って来たものでした。その時分の東京の町ではめったに嗅ぐことの出来なかった、あの異国的な、そうして而もたまらなくおいしそうな匂は、甚しく少年の食欲を刺激して、私は毎日こんなものを食べている笹沼の境涯が羨ましくてなりません。笹沼の体には支那料理の匂が手にも着物にも沁み込んでいて、学校へ来ても匂っていました。又偕楽園の Cock たちが洲崎の遊廓へ遊びに行くと、すぐに職業を見破られたと云うことでした。私たちは学校の昼食の時間や、運動会や遠足の時などに、



いつも笹沼と弁当のお数を交換し合った。』<sup>11)</sup>そして、晩年の谷崎にとって借樂園跡は「生家の跡と同じくらいになつかしい」<sup>12)</sup>と「ふるさと」の中に書いてある。こういうふうには、谷崎は、中華料理が日本でまだ珍しい時から、既にそれに親しみ始め、又、この幼少時代の体験が後日の創作に大きな影響を与えたと思う。谷崎の作品を読んでも分かるように、いろいろな中華料理が登場した。そして、谷崎は「支那に永く居る日本人よりも私の方が料理の事はよく知っている位であった」<sup>13)</sup>ということまで述べていた。したがって、谷崎はほかの作家と違って、中華料理という別世界から中国文化に触れた。谷崎はまず目、鼻、口、身から中国を体験して、感覚的に中国文化を覚え、心身両面から自分なりの中国への憧憬あるいは幻想というものを描いたわけである。そういう体験への追憶が、谷崎の中国文化から取材する一つの重要な原因だと思う。

### 3.2 文化記憶の移植 — 漢文学

谷崎の中国古典文化から取材するもう一つの原因として、漢文学がある。谷崎に「全生涯を通じ、凡そ師と名づくべき人々のうちで、此の人以上に私に強い影響を与えた先生はない」<sup>14)</sup>と言われている稲葉清吉先生は、谷崎が本格的に漢文学に触れるきっかけを作った。稲葉先生のことについて、谷崎は次の通り述べていた。「稲葉清吉先生は、私が明治二十五年、坂本小学校の尋常一年に九月の二期から入学した時の担任の先生であるが、翌年の四月、先生は私を落第させて置いて他の級の担任に転じたので、私はそれから尋常科を卒業するまで、四年間野川先生の教を受けた。然るに稲葉先生とはそうなる宿命があったものと見えて、明治三十年四月、私が高等一年に這入ると、先生は又私たちの級に戻って来、それから四年間を受け持ってくれた。」「先生の思想は王陽明派の儒学と、禅学と、それにプラトンやショーペンハウエルの唯心哲学を加味したものであったらしく、近頃で云えば鈴木大拙博士の境地などに近いものがあったのではなかったか

11) 『谷崎潤一郎全集』(第29巻)、中央公論社、昭和33年、p84。

12) 『谷崎潤一郎全集』(第22巻)、中央公論社、昭和58年、p409。

13) 『谷崎潤一郎全集』(第14巻)、中央公論社、昭和33年、p84。

14) 『谷崎潤一郎全集』(第29巻)、中央公論社、昭和33年、p43。

と思える。と云っても大拙博士のような深い学問や識見があった訳ではないが、尋常師範出の教師としては、特筆に値する勉強家で、確乎たる信念の持主であったと云えよう。私は先生が青木嵩山堂で売っていた、六号でベタで組んだ活字版の白文の王陽明全書十巻を蔵していて、折々その一巻を携え来って学校で読んでいたことを覚えており、「先生の漢文の素養は、一般に今より程度の高かった当時としても、普通の小学校の教師よりは水準を抜いていたであろうと思う。」<sup>15)</sup> 谷崎はこの先生の薫陶に浴して、そんな書籍に触れただけでなく、十三、四歳のころ、さらに亀嶋町の秋香塾に通って漢文を学んでいた。素読であっても、「大学」、「中庸」、「論語」、「孟子」また十八史略、文章規範ぐらゐまで進んだ。しかも、谷崎は素読だけでは物足りないで、ときどき文意を問うこともあった。そういう文化記憶の移植で、中国古典を自分のテキストに織り込んだのである。

## 終わりに

「麒麟」は、古代中国を舞台に、中国の孔子を主人公に創作された小説であるが、それは谷崎が中国旅行に行く前の作品である。中国旅行に行ってから、中国をこの目で見たり、この身で感じたりして創作した作品とは違い、谷崎の幼年時代の中華料理の飲食体験と中国古典の読書体験と深い関わりを持っている。谷崎の「私の『幼少時代』について」という文章で述べたように、「自分が小説家として今日までに成し遂げた仕事は、従来考えていたよりも一層多く、自分の幼少時代の環境に負うところがあるのではあるまいか、と云うことである。…私の場合、現在自分が持っているものの大部分が案外幼少年時代に既に悉く芽生えていたのであって、青年時代以後において、ほんとうに身についたものは、そんなに沢山はないような気がするのである」<sup>16)</sup>。そういう幼年時代の体験があるので、谷崎は中国旅行に行く前にも中国についての想像を馳せることができ、自分の作品を中国古典の引用の上に改めて組み立てて、その作品の意義も中国古典との相互参照、相互関連の中で生まれるのである。つまり、「麒麟」は中国古典と間テク

---

15) 『谷崎潤一郎全集』(第29巻)、中央公論社、昭和33年、p 164。

16) 『谷崎潤一郎全集』(第30巻)、中央公論社、昭和33年、p 299。

スト性をなし、それは谷崎の時空を超えた中国古典文化との対話によってできた作品ともいえると思う。

#### 参考文献

1. 谷崎潤一郎：『谷崎潤一郎全集』，中央公論社，昭和33年。
2. 谷崎潤一郎：『谷崎潤一郎全集』，中央公論社，昭和58年。
3. 西原大輔：『谷崎潤一郎とオリエンタリズム』，中公叢書，中央公論新社，2003年。
4. 原田邦夫訳，ジュリア・クリステヴァ：『記号の解体学－セメイオチケ1』，せりか書房，1983年。
5. 《拾遺記》，中华书局，2019年。
6. 《史记》，天津古籍出版社 国际文化出版公司，1995年。
7. 《列子》，中华书局，2019年。
8. 《四书五经》，天津古籍出版社，1998年。
9. 《山海经》，北京出版集团公司 北京教育出版社，2017年。
10. 庞朴：《中国儒学》（第四卷），东方出版中心，1997年。